

平成27年1月

佛乗寺檀信徒の皆さまへ

佛乗寺 住職 笠原 建道
講頭 廣田 正至

新しい年が始まって早くも10日が過ぎようとしております。寒波とインフルエンザが猛威をふるっておりますが、風邪など召されておられませんでしょうか。

さて、本年はご案内の通り、二祖日興上人がお生まれになって770年の節目の年にあたります。日興上人は、寛元4年(1246年)3月8日に現在の山梨県富士川町鰍沢で誕生されました。幼少の頃に静岡・蒲原の四十九院に登り勉学に励まれ、日蓮大聖人様が、一切経を閲覧されるため、富士岩本の実相寺に滞在されていた正嘉2年(1259年)、大聖人様のお弟子になり、伯耆房と名を賜りました。

以来、大聖人様に常にお供をしてお給仕に励まれました。佐渡流罪の時には、多くの島民を折伏され、その中からは、阿仏房の曾孫である日満師のように、日興上人のお弟子となり、北国の導師として佐渡で富士大石寺の教えを弘めた方が出ております。

大聖人様が身延に入られた直接の因は、日興上人の折伏にあります。身延の地頭職にあった波木井実長を大聖人に導き、そのことが縁となり、鎌倉を離れた大聖人を身延にお迎えするようになったのです。このことは世間ではあまり知られておりませんが、日興上人の護法の一念であると拝します。

末法の御本仏として、出世の御本懐である「本門戒壇の大御本尊」を御図顕遊ばされた地が、日興上人との深い因縁で結ばれていることは不思議なことです。

後に、地頭であった波木井実長が大聖人様の教えから外れ、謗法を重ねるようになったとき、日興上人は幾度も諫め、繰り返し教導をされましたが、謗法の垢にまみれた波木井実長は日興上人の御指南に随うことが出来ませんでした。ついに身延を離れる決意をされた時のお手紙が次ぎに挙げる『原殿書』です。

『原殿書』

「身延澤を罷出候事面目なさ、本意なさ難申尽候へども、打還案し候へば、いづくにても聖人の御義を相継進て、世に立て候はん事こそ詮にて候へ。さりともと奉思、御弟子悉師敵対せられ候ぬ。日興一人本師の正義を存じて本懐を奉逐候べき仁に相当て覚候へば、本意無忘候。又君達は何れも正義を御存知候へば悦入候」

身延を離れることは面目のないところではあるが、よくよく考えれば、大聖人様の仏法を正しく受け継ぎ、世の中のために守り抜くことこそ、最も大切なことである、と大聖人様からの一切を託された日興上人のお立場と、固い決意が述べられています。

私たち日蓮正宗は、この日興上人が富士の麓に開かれた大石寺を総本山と仰ぎ、日興上人が守り伝えた大御本尊様を根本の本尊として、自らと周りの方々の幸せを願って信仰に励む宗旨です。

大聖人様以来750年、いささかも揺るぎのない信仰に大きな功德が具わることは道理の上からも明らかです。それは、一本筋が通った人が尊敬されるのと同じ理由です。誰がどのように言おうとも、750年の昔から平成の今日まで、大聖人様の教えを守り通したことは疑いのない事実です。その根源にあるのが日興上人のお振る舞いであることを肝に銘じ、日興上人への御報恩に励もうではありませんか。

寒さが厳しくなる季節です。風邪などひかぬようご用心下さい。寒い中にも日差しに力強さが戻ってきているように感じます。春は遠くありません。ご精進をお祈りいたします。

以上